
オペラグラス

乙未七菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オペラグラス

【Nコード】

N2087B

【作者名】

乙未七菜

【あらすじ】

わたしが本気で願うことが、彼と同じならばよいなと思う真夜中のベランダはなし。

「むう……」

流れ星はまだ降らない。空は濁って、流れ星どころかノーマルな星すらも見えない。

そんなチープなオペラグラスじゃあ見えないよと彼は言ったけれど、わたしはきかなかった。昔、肉眼で見えた流れ星と、なんでも拡大できるチープなオペラグラスを信じている。

「ねえ」

彼がわたしのスカートの端をひっぱった。ベランダのコンクリートの上に投げ出されたそれは、レースとフリルを満載にしてそこにいる。フリフリな彼女はこんな極寒の地なんて似合わないわと少し不機嫌そうだった。

「楽しい？」

「まあ、それなりに。いろいろ大きく見えるし。」

「肉眼じゃ駄目なの？」

「駄目じゃないけど、楽しいし。」

おれは楽しくない、とも言わんばかりの膨れっぷり。何故そんなに不機嫌斜めなのかは知らないが、たぶん早く中に入ってぬくぬくしたいがためだろう。こんな不毛なことに費やす時間など彼にはない。こんなところで寒い寒いいいながらいつ降るともわからない星を探しているよりかは部屋の中でぬくぬくしている方が彼にとってよっぽどよからう。

しかし、それにしても、彼の手が冷たい。

「寒い？」

「当たり前でしょ。」

確かに。彼はパジャマ姿、私は帽子に手袋にマフラーにコートに膝掛けに、全くもう完全防備なのだから。彼は依然としてむうと膨れたままだ。その顔がオペラグラス越しによく見える。見えすぎるく

らい、よく見える。

「本当にこの方角で合ってるの？」

「うん。」

「本当に今日降るの？」

「うん。」

「本当にこの時間でいいの？」

「うん。」

「…なんでさつきからずっとオペラグラス越しなの？」

「…はい？」

唐突に全然関係のない話題を振られて戸惑う。

「だから、こっち向く時くらいはずしててもいいでしょ。」

「うーん、なんとなく。」

わたしは更に膨れていく彼をオペラグラス越しに見る。

「なんとなく、越谷さんは流れ星に似ているから。」

「はい？」

なんとなく、他人事みたいに感じてしまうから。なんとなく、空の向こうのものみたいだから。なんとなく、瞬間的な感じがするから。なんとなく、遠くかけ離れているみたいだから。なんとなく、それでも傍にいたみたいなのがするから。だけどそれは全て思い違いなのかもしれない。

彼はふうとため息をついて立ち上がった。

「中、入る。」

「ご自由にどうぞ。」

「星降ったら教えて。」

「うん。」

「適当にお願いしに来るから。」

「真面目にやないと叶わないと思うよ。」

「じゃあ真面目にやる。」

「うん。」

「じゃあね。」

からからと軽い音を立ててサッシが開いた。それから一定の間があって、彼の気配がサッシの向こうに消えて、そしてまたからからとサッシが閉まった。

「…むう」

わたしはオペラグラスをはずして空を見た。星が降る気配はない。

星が降ったら、

彼が願うこととわたしが願うことが一緒だいいなと思った。ただど流れ星に願うまでもないことのような気がして、だけどそれは気の所為のような気もして、わたしは再びオペラグラスを手にとった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2087b/>

オペラグラス

2010年11月3日14時04分発行